「STの音響学活用相談会」 求められているもの*

○竹内京子（順天堂大），青木直史（北大），荒井隆行（上智大），△鈴木恵子（北里大），
世木秀明（千葉工大），△秦若菜（北里大），安啓一（筑波技術大）

1 はじめに

言語聴覚士は，ことばのリハビリを行う職業である。その養成校では，音響学（聴覚心理学を含む）が必修である。しかしながら，学生の苦手で嫌いな科目の筆頭である。[1]さらに，現役の言語聴覚士も苦手であることに変わりなく[2]，卒業後も臨床において音響学の知識を学び，活用する必要性を感じつつも，実現できないでいるようである。現役の ST のための音響学の講習会[3]（第 8 回）では，臨床における音響学の活用法を話し合った。本発表では，その経過と同時に行ったアンケート調査の結果を報告する。

2 ＳＴのための音響学

2.1 講習会の概要

2021 年 3 月より，言語聴覚士養成校の音響学の授業の内容と臨床との関わりを調査することを目的として，「ＳＴのための音響学」という講習会を開催している。対象は主に現役の ST であるが, ST 養成校の学生，音響学教師はじめ、ST の臨床に興味のある一般の方も参加可能である。また，気軽に参加できるように Zoom によるオンライン開催で行った。

これまでの講習会で扱った内容は，音響分析ソフトの使い方，録音方法，音響学･聴覚心理学の授業の復習などである。第８回は，「ＳＴ の臨床における音響分析の活用を考える」（担当：秦若葉・鈴木恵子）というテーマで，講習会を行った。前半では，臨床での音響学の応用例や研究発表例を紹介し，後半は参加者がグループに分かれ，決められたトピックについて話し合う場を設けた。

2.2 現役ＳＴが講習会に求めるもの

第８回講習会の申し込み時の事前アンケートの内容を以下に紹介する。「ＳＴのための音響学」講習会に以前に参加したことがある者は 30 名（45 名中）、参加後に自分で何か始めた者は 7 名であった。具体的な内容は，主に録音と音響分析であった。さらに，講習会で「音響学を使ったお互いの臨床の工夫について，他の参加者と話し合いたいか？」という質問の回答は（はい 18 名、いいえ 27 名）であった。ディスカッションの具体的なテーマとしては，「臨床での活用方法」と答える者が多かったが，具体的な事例を示している者はほとんどいなかった。「本講習会で知りたいこと」に対する質問にも，同様の答が多く、自らは実践していないが，多くの参加者 ST が，今後の手掛かりを探している様子がうかがえた。

2.3 講習会参加後の変化

講習会終了後にもアンケート行い，以下のような結果を得た。「本講習会で得たもので明日から使いたいもの」は，当日紹介した文献や，Praat 等による音響分析，聴覚障害における活用法を答える者もいたが，大部分の参加者は，すぐに行動に起こすまでには至らなかったようだ。

2.4 復習したくなった知識

今回の講習会に参加して、以下の項目について，復習したくなった知識を，いいえ(1)はい(5)の 5 段階で回答してもらった。

・音響分析ソフト WaveSurfer の使い方
・音響分析ソフト Praat の使い方
・分節ラベリング
・音声の録音方法・保存方法
・音響学の知識
・聴覚心理学の知識

全ての項目で，復習したい度合いは同じように高かったが，「苦手な音響学・聴覚心理学

* What is required for “a meeting for speech therapists to discuss how to use acoustics.”, by TAKEUCHI, Kyoko (Juntendo University), AOKI, Naofumi (Hokkaido University), ARAI, Takayuki (Sophia University), SUZUKI, Keiko・HATA Wakana (Kitasato University), SEKI, Hideaki (Chiba Institut of Technology) and YASU, Keiichi (Tsukuba University of Technology).

の知識より，ソフトや分節ラベリングなど，実践的なほうが興味がわく」という声もあった。

2.5 グループディスカッション

講習会の後半で，Zoom のブレイクアウトルームで 7 グループに分かれ，以下の４テーマから各自が選択して話した。主催者側の音響学講師・ＳＴもグループに参加した。本講習会では，slack というコミュニケーションツールを使用しており，各グループの話し合いのまとめを掲載し，他のグループの内容も分かるようにした。

さらに，講習後のアンケートで，各自が以下のような割合で話していたことが分かった。

・ST 同志で話し合ってみたいこと（0 名）
・他の ST に聞いてみたいこと（7 名）
・自分がやってみたいと思っていること（10 名）
・実践していること（2 名）

また，参加者各自と，各グループで具体的に話した内容も回答してもらった。自分がやってみたいと思っていることが最も多かったが，参加者の臨床上の対象者は様々であり，それに応じて，話された内容も様々だった。

2.6 話し合いの効果

以下に、ブレイクアウトルームの感想を紹介する。好意的な回答が多かった。

・ST 以外の方とも交流できたのが良かった。
・自分の思いを発言することで、ぼんやりしていた考えや、もやもやしていた悩みに焦点を当てる機会となり、アドバイスもいただけてよいきっかけをいただきました。
・地域や環境の違う ST の先生方の考えていることを聞けて、自分も頑張ろう！と励みになり、すごく良かったです！
・様々な意見を伺うことができて充実した時間を過ごすことができました。今回の講習会で感じたことは、みんな同じような悩みを持っていて、どのように音響分析を活用していけば良いか模索中なんだということを感じました。
・30 分と聞いたとき、少し長いなと感じましたが、実際に話してみるとすごく楽しく、あっという間でした。
・異なる視点での話し合いは新しい考えを知ったり、ひらめきをもらったりできるので今後も出来たら良いなと思います。

2.7 より良い話し合いのために

今後の話し合いの方法の改善点についても調査し，以下のような回答が見られた。

・司会の存在が重要
・テーマごとにグループを分ける
・Zoom の使い方をよく知る
・カメラをオンにできるように準備する

3　おわりに

本発表では，ＳＴの「臨床における音響学の活用方法」を話し合う講習会の実施報告を行った。具体的には実践している者は少ないが，模索している者が多く．今回のように他人に相談できる会は，効果的であり，必要であることが分かった。

4　今後の課題

今後は，現役ＳＴからの実際の臨床での様子の発信をもとに，どのようなことが可能であるかを考え，講習会で紹介できる内容を増やしたい。さらに，その内容を養成校の授業に還元していきたい。

謝辞

本発表は，言語聴覚士養成課程における「音響学教育」の現状調査と授業ガイドライン，教材作成（科研費番号 20K03074）と声道模型を中心とした音響学・音声科学の教育と ICT の融合（科研費番号 21K02889）の成果である。また、「第８回 ＳＴ のための音響学」は、日本音響学会 音響教育委員会，日本音声学会，東京都言語聴覚士会が後援していただいたことに感謝する。

参考文献

[1] 竹内京子，越智景子，音声学・音響学への関心度,苦手度実態調査言語聴覚士養成校学生のアンケートから，日本音響学会研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2015

[2] 竹内京子，青木直史，荒井隆行，鈴木恵子，世木秀明，秦若菜，安啓一，ST 養成校の音響学の思い出調査
研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2021

[3] 本科研費のＨＰ
https://sites.google.com/view/stonkyo